

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
99-006	民国期上海における民衆の経済活動と社会倫理		
	中国	上海社会科学院	2000.9 ~
	岩間一弘	東京大学大学院	院生修士

研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

本研究は、中華民国時代の上海地域における商工業の発展がどのようにして達成されたのか、人々の生活意識の変容と関連させて考察しようとするものである。

商人・実業家を地域社会の一員と捉えたと、彼らは単に利潤を追求していたばかりではなく、各種利害関係者との間に調和を図るため、様々な社会的役割を果たしていたことがわかる。実際に、東アジアの経済・政治・文化の中心であった民国期の上海では、不動産売買などの投機的な商売が過熱する一方で、「商人倫理」の成熟が見られた。例えば、当時の上海は、最も多くの民間慈善公益団体が活発に運営された地域でもある。

本研究は、第一に、民国期上海の商人・実業家が、地域経済の振興や、政治社会の安定をどのように実現しようとしたのか見ていく。そして第二に、視点を人々の世俗的な日常生活の次元に置いて、上海における民衆の生活意識の変化が、「商人倫理」をどのように再編しつつあったのか考察する。

研究テーマを具体的な現地資料に即して説明すれば、以下の五点が挙げられる。

- ① 商店経営や店員生活に関する各種の小冊子から、当時の地域社会における商人の理想像を探る。
- ② 上海総商会や各工商同業公会在が発行した業界雑誌、並びに工商同業公会の会議録を用いて、「商業道徳」をめぐる議論を整理する。
- ③ 商人が主導する慈善救済団体の報告冊および関連文書の研究を進展させる。特に、障害者のための「上海残疾病院」と、浮浪者のための「上海遊民習勤所」について検討したい。
- ④ 上海市政府社会局と公安局、ならびに各警察組織の報告書や関連文書から、「商人倫理」が提唱されなければならなかった基層社会の実態を垣間見る。
- ⑤ 都市民衆向けの生活情報雑誌、通俗小説、新聞のコラムを用いて、民衆の消費感覚、及び民衆から見た商人・実業家像の変化を観察する。

以上の文献資料の解析に加え、その成果に基づいて、上海における「商人倫理」の歴史と現状について聞き取り調査を試みたい。

2001年 9 月 4 日 記 入

研 究 留 学 成 果 報 告 書

助 成 番 号 : 99 - 006

岩 間 一 弘 (中 国 ・ 上 海 社 会 科 学 院 歴 史 研 究 所)

2000年 9 月 19日 から 2001年 8 月 31日 までの
11カ 月 半 の 間、報 告 者 は 上 海 に 滞 在 し、中 国
最 初 期 の ホ ワ イ ト カ ラ ー 層 に 関 す る 史 料 を 収
集 し た。上 海 社 会 科 学 院 歴 史 研 究 所 お よ び 上
海 図 書 館 ・ 上 海 市 档 案 館 の 協 力 を 得 て、数 多
く の 貴 重 な 関 連 史 料 を 発 掘 す る こ と が で き た。
さ ら に、中 国 国 家 図 書 館 (北 京)、中 山 文 献
館 (広 州)、中 国 第 二 歴 史 档 案 館 (南 京) へ
史 料 収 集 へ 行 く こ と も で き た。収 集 し た 文 献
史 料 の 送 料 は、書 籍 を 除 い た 複 写 文 献 だ け で
も 約 55キ ロ グ ラ ム (ダ ン ボ ー ル 4 箱) に 達
し た。

報 告 者 は そ れ を 基 礎 史 料 と し て、数 年 後 に
博 士 論 文 「 近 代 中 国 の ホ ワ イ ト カ ラ ー : 民 国

期上海における職員層の形成と商科教育、1917～1941年（仮）」を提出したいと考えている。またそれに先立って、収集した史料の一部を入念に分析し、さらに他の史料を補足して、個別研究論文としても成果を公表することを計画している。くわえて1年後の2002年9月4～6日には、上海社会科学院歴史研究所と日本上海史研究会の主催で、「上海史青年学者国際討論会」が開催される予定である。私はその場を借りて研究成果の一部を報告し、留学中に受けた学恩に少しでも報いたいと考えている。

報告者は、民国期の上海の職員層に関する史料を収集するにあたって、統計データ・商科教育・科学管理・職業生活・職業婦人の5テーマを設定した。それぞれの課題に関する主な成果は以下の通りである。

- ① 太平洋戦争勃発前夜における上海職員層の生活状況に関する統計

上海の職員層に関する調査報告が、1940年前後に2通り残されていることがわかった。1つは、当時弱冠23歳にして中国共産党江蘇省委員会指導下の職員運動委員会の書記を務めていた顧準による「上海職員与職員運動(1)~(4)」『職業生活』第1巻第1期~第4期(1939年4月15日~5月6日)。そしてもう1つは、共同租界工部局の工業社会処が1941年末に実施した調査の報告書(“Provisional Index of Cost of Living of Chinese Salaried Employees in Shanghai”, 上海市档案馆所蔵)である。両者は調査目的を異にしていたため、その調査結果にも大きな違いがある。概して、前者は「小職員」といわれた中下級の職員層に、後者は経営者に近い中上級の職員層に注目していることがわかった。

② 商科教育をめぐる官・商・学の関係

戦前の中国における大学の商科および商学

院の校史資料を収集した。とくに中国唯一の商学単科大学であった国立上海商学院に関しては、『院務月刊』『院務半月刊』に至るまで綿密に精査した。今後の課題として、国立上海商学院がどのような人間関係のなかで、どのようにして設立・運営されたのかを、院長の郭秉文の言動を中心にしながら検討してみたい。また、商科教育のあり方をめぐる当時の議論を参照にしながら、国立上海商学院が商科教育を推進した理念と組織を、他の私立大学等の場合と比較・検討してみたい。

③ 科学管理の導入と職業観の変遷

これまでの中国都市史や企業経営史研究ではまったく注目されなかったが、1930年前後の上海では、中国工商管理協会・上海機制国貨工廠聯合会・中国人事管理学会といった学会が設立され、当時の中国をリードする著名な実業人と学者が参与した。これらの学会は、工場・商店およびその他の機関の組織と経営・

管理を「科学」化することを目的として掲げていた。そして、企業の経営・管理を「科学」化しようとする動向のなかで、西洋式の商科教育を受けた中間管理職や会計・事務職が必要とされるようになり、上海においても職員（ホワイトカラー）層が勃興してきたと考えられる。今回の留学期間中には、中国工商管理協会および中国人事管理学会が発行した機関誌およびその他の出版物を複写・収集することができた。くわえて、それらの学会において「科学管理」の手本としてしばしば取り上げられていた、商務印書館と康元印刷製缶廠の経営文書等を、一部収集することもできた。今後の課題としては、それらを入念に読み込んで、上海において職員層が誕生・勃興する経緯を描き出してみたい。また、その過程を日本や欧米の場合と比較・検討してみたい。

④ 職業生活のなかのナショナルリズムと「公

民」のレトリック

これまで職員層を主要読者とした大衆誌としては、鄒韜奮が主編した『生活（週刊）』のみが取り上げられて考察されてきた。今回の留学では、その他にも『職業生活』『長城』『益友』といった雑誌が、戦前上海の職員層および都市中間層に大きな影響を与えていたことをつきとめられた。多くの記事を複写・収集できたので、それらの雑誌記事がどのように職業生活を描写し、また職業青年をどのように導こうとしていたのか読み取っていく作業を今後の課題としたい。

⑤ 女性の職業観と職業婦人に対するイメージ

やや意外なことに、近代中国の職業婦人に関しては先行研究が完全に欠落している。今回の留学では、当時発行されていた夥しい種類の女性誌（例えば『婦女雜誌』『女子月刊』『女声』等）に掲載されている職業問題に関

する記事を収集した。それらを整理・分析する作業は今後の課題である。

その他にも、報告者は商務印書館（北京）、中華職業教育社（上海、北京）へ行き、戦前の運営状況に関する文書を閲覧させていただいた。また、1920年に上海で生まれてセントジョーンズ大学（上海）およびワシントン大学で経済学・経済史を学ばれた張仲礼氏（上海社会科学院元院長）には、聞き取り調査に応じていただけた。

以上のよう、戦前上海に出現していた中国初期のホワイトカラー層を中国都市史のなかに位置づけるための基本文献を収集することができたことを、今回の留学の成果として報告します。